

ケンペルの「日本」の数奇な成り立ち

渡 邊 直 樹

ケンペルの遺稿

エンゲルベルト・ケンペルは、以下ケンペルと記す。二年間のオランダ出島商館医師の任務を終え、一六九二年一〇月三十一日、日の出とともに長崎港からドイツに向け帰国の途に就く。バタヴィアを再度経由するが、帰路はアフリカの喜望峯を回り、ほぼ一年後の一六九三年一〇月六日にオランダのアムステルダムに到着する。

ケンペルは、しかし、すぐに故郷レムゴに向かうことはなかった。一六九三年十一月二日に医学の学位を取得すべく、兄のヨアヒムが講師を勤めていたこともあるライデン大学に学籍登録する。そして、バタヴィア滞在中に知り合い、親しく交わるようになったオランダ人アントニー・パルベの好意にも与り、一年かけて博士論文を書き上げる。それを印刷に付し、翌年四月に医学・薬学に関する博士論文「異国に取材した観察記録一〇項目を取りまとめた医学博士請求論文」により、医学博士の学位を取得するのである。

この後、一六九四年一〇月五日、ようやくレムゴ郊外のシュタインホーフ館に帰りつく。普通、訪れることのない異国へ旅した者が道中記を執筆し、体験と最新情報を誇ることが常であるが、ケンペルもそれに取り掛かる。まず、スウェーデン出発からロシア、ペルシャ、バタヴィアでの体験や動植物の観察記録、それに博士論文の概要等を記した報告書の出版を計画する。

しかし、一七一六年の死まで、あますところは二〇年ほどしかなかった。それに引きかえケンペルの体験と持ち帰ったものが多すぎた。ケンペル自身が執筆できたその報告といえるものは、ラテン語で著わした大著『廻国奇観』(Amoenitatum Exoticarum、一七一二)のみであった。この原題は「政治学的、自然学的、医学的テーマにかんする異国の魅力ある事項五巻。著者エンゲルベル

ト・ケンペル博士が東方世界の旅行において注意深く行ったペルシャとアジア極地に関する様々な報告、観察、紀行を含む」というものである。

これ以外にロシア、ペルシャ、日本、シャムに関する報告断片が存在したが、どれもまとまった著書として完成するには至らなかった。ケンペルの遺品のほとんどは、蒐集品も含め英国王立協会(Royal Society)のスローン卿(一六六〇-一七五三)に買い取られる。しかし、このことはむしろ幸運であった。

日本にかんしては、卿の秘書スイス人ショイヒツァー(一七〇二-二九)が卿の求めに応じ、ケンペルの手稿「今日の日本」(Heutiges Japan)を英語に翻訳・編纂し、一七二七年に『日本史』(The History of Japan)を完成させた。これがオランダ語やフランス語にすぐさま翻訳され、大陸に広く流布し、一八世紀ヨーロッパの日本観の形成に与って大きな力となった。この原典も含め、スローン卿が買い取った日本関係資料は現在、大英博物館に〈スローン・コレクション〉として保存されている。

一方、この約五五年後にドイツ人ドーム(一七五一-一八二〇)が、レムゴで新たに発見された二つの原稿、「ケンペル手稿」と「甥ヘルマンによる清書」とみなされる原典を基にドイツ語版『日本の歴史と紀行』(Geschichte und Beschreibung von Japan, 一巻 一七七七, 二巻 一七七九)を編纂した。英語版と題名こそ異なるが、内容や構成、付録においてほぼ同じであった。ただし、このドーム版の基となったドイツ語原典二点は、現在失われて存在しない。

ショイヒツァー英語版のオランダ語訳『日本紀行』(De Beschryving van Japan)が二年後一七二九年に、再販が三三年に発刊されるが、これがオランダ語による情報にしか頼ることができ

なかった日本に輸入される。そして、一九世紀中葉の日本の国家形成や外交戦略の構築などの歴史的展開を説明する際に、少なからぬ意味をもつものとなる。

わたしたちが手にすることができるこれらのテキスト『日本史』（英語）、『日本紀行』（オランダ語）、『日本の歴史、自然、住民、経済』（フランス語）、『日本の歴史と紀行』（ドイツ語）、そして近年の『ケンペル全集六巻』（二〇〇一～二〇〇三年）が公刊されるに至る数奇な経緯と内容とが、ケンペルの日本報告に時を超えたりアリティと魅力とを与えている。と同時に、ケンペルの「旅」は、現代からは想像でしか知ることができない歴史が息づく興味深い思想世界へわたしたちをいざなってくれる。

『廻国奇観』の出版

ケンペル死後、遺された資料や記録の行方については完全には解明されていない。一六八一年八月にスウェーデンのペルシャ使節団の秘書に採用されてより、フィンランド、ロシア・モスクワ、ペルシャのアストラハンやバンダーレ・アッバース、シャム・アユタヤ、インドネシア・バタヴィアを経て日本・長崎に至り二年間滞在の後、喜望峰回りで帰国。オランダ・ライデン大学で博士の学位を取得し、一六九四年、ようやく故郷レムゴに戻ったケンペル。帰郷後、旅の途次手に入れた蒐集品や作成した動植物標本、自分で書き記した地図、メモ等をまとめる作業に取りかかり、博士論文概要を含め、一八年かけて『廻国奇観』を完成させた。『廻国奇観』はラテン語、四つ折り版全五巻九一二頁に及ぶ。ペルシャのことが大部分を占めるが、インド、セイロン等のアジア諸国、動植物や風土病についての報告がある。一七一四年にパリのジュルナル・サヴァン（*Journal des Sçavans*）が広告を引き受けている。これを引用するかたちで＜ライブツィヒ新学術新聞＞が翌一七一五年に日本紹介記事を掲載しているが、ドイツではこの学術的価値が注目されることはまだなかった¹。当初、本の題名は旅行記風の『異国の珍しいもの』（*Curiositates Exoticae*）であった。しかし、ケンペルは編纂の過程でいくつかの論文を付加することによって、内容の学術的価値と真

実性を高める必要性を意識したのであろうか。『廻国奇観』と変更した。

二〇年近くも歳月を要した原因はレムゴのマイヤー書店では証拠となるスケッチの銅版画をうまく製作できず、当時印刷技術に優れたオランダの出版者へ依頼するなど、編集作業に手間取ったためである。結局フランスに生まれ、大陸の情報集積地であったオランダに活動の場をもったマロ（一六六三 - 一七五二）が構図を描き、ゴーレ（一六六〇 - 一七三七）が彫金を施すことで完成を見た。発刊までに多くの年月を要したのは、レムゴという小さな町での編纂作業や学術書的に精選されたラテン語による執筆の追究²、ラテン語活字の校正に必要以上の時間がかかったためである。

医師としての仕事もケンペルの本意ではなかったようである。『廻国奇観』序文にはこうある。

もう数カ月あれば完成までに整理されていない資料の分類と関連づけが可能となり、それ以外は銅版画に彫るためのスケッチを写す外は何も不足しているものはなかった……。しかし多くの義務や煩わしさがわたしを待ち受け、わたしが熱望している決意が実現されるにはほど遠かった。つまり、ほとんどわたしは仕事にとりかかれなかった。というのも、うんざりする家政上の問題がわたしの障害となったからである。……私の領主リッペ伯が、不肖わたくしをお屋敷の侍医として情け深くもとりたてたからである。わたしはそれを非常に名誉だとは思うのだが、しかしなんとわたしの人生の大切な時間の多くを安い報酬で無駄にしてしまったことか……³。

リッペ宮廷で彼の知己を得た哲学者ライブニッツ（一六四六 - 一七一六）は、ケンペルの遅々として進まない日本報告への苛立ちを、一七一一年七月にリンテルン大学歴史学・論理学の教授ビーアリング（一六七六 - 一七二八）宛て手紙に書いている。日本情報はケンペルに頼るしかないが、博士論文提出以後すでに一八年も経っている。三三歳も年下の娘と結婚して日本報告を公刊しようという意志がなくなってしまったのでしよ

うか、⁴と。

『廻国奇観』の構成と内容

ラテン語による『廻国奇観』の膨大な分量の要諦をドイツ人のケンペル研究者カール・マイヤー・レムゴがその生涯を踏まえつつ紹介している。

ヨーロッパと近い距離にあるペルシャとの交易は、東アジアとのそれに比べると、安定的かつ大きな利益を保証してくれるものであったのであろう。『廻国奇観』の第一巻と第二巻の大部分、それに第三巻の四分の一、第四巻の全てがペルシャにあてられている。第五巻は日本の植物誌である。その他六一篇の研究論文があり、そのうち五篇は日本について、六篇がインドについてである。特に日本については、天文図から動植物に至る一三四〇種の和漢名が記された中村惕斎の『訓蒙図彙』(一六六六 - 一六八六)が大いに役に立った。植物については五四五頁、八六三種が名前とともにスケッチされている。その文様の滑らかさ、粗さ、綿毛のような柔らかさ、しなやかさが見事に描かれている。

ヨーロッパ人にとって、ヨーロッパ以外の地で生育している植物の薬効が関心事であったことが、ケンペルの詳細な紹介からわかる。ただ、ケンペルの命名法はラテン語であったが、後世ツェンベリ(一七四三 - 一八二八)がリンネ(一七〇七 - 一七七八)の方法により、属と種に則って再度これら植物の多くを命名し直したため、ツェンベリが日本植物学の父と呼ばれることになった。

その他『廻国奇観』は歴史、政治体制、民俗学、考古学、医学、動物学、芸術といった多様な内容を包摂している。ケンペルが語るところによれば、これらは「わたしがねつ造したものは何もなく、事務室の香りや机上のランプの臭いのするようなものは何一つ書き加えることはしなかった。」「新しいもの、正確に伝えられていないもの、ほとんど知られていないものを観察し蒐集すること以外に旅行の目的はなかった⁵。」ケンペルの客観的相対的観察姿勢は、レムゴ・ニコライ教会の主席牧師であった父親がエンゲルベルトとの別れに際して、真摯な生き方と良心に従う行動を論じた倫理観を思い起こさせる。

ともあれ、『廻国奇観』の出版には莫大な費用

がかかったに違いない。しかし、ケンペルは予約購読者の募集も、力ある人への働きかけもしていない。むしろそれゆえ、内容については何ら干渉を受けず、当時のヨーロッパ社会への疑問やオランダ東インド会社の管理運営についても記すことができた。また、ケンペルがラテン語による記述を選択したことは、内容の学術的価値を顧慮したためであろう。当時、一般に学術書はラテン語で書かれた。

公刊に至るまで甥のヨーハン・ヘルマンの大きな援助もあった。彼は病気がちの叔父に代わり口述筆記したこともあると考えられている。



(Amoenitatum Exoticarum, 1712 『廻国奇観』)

遺稿「今日の日本」の存在

ケンペルが語るところでは、『廻国奇観』は今後順次刊行される次の三冊の予告編に過ぎなかった。

- 一「今日の日本」(Japoniam nostri temporis)、ドイツ語、挿絵約四〇枚。
- 一「ガンジス河以遠の植物界標本図鑑」(Herbarii trans-Gangetici Specimen)、ラテン語、図版約五〇〇枚。
- 一「三部より成る世界旅行記」(Hodoeporicum Tripartitum)、ラテン語およびドイツ語。

ケンペルはこれら三冊の出版元について探している。しかしながら、特に費用と読者の獲得というところで大きな困難が予想された。ラテン語からドイツ語への翻訳についても時間と困難を伴っ

た。「別途日本紀行を書き、詳述するつもりである⁶」と語ったケンペルの「今日の日本」を含むこれら三冊はいずれも彼の生前には完成しなかった。「今日の日本」にはケンペルの見た同時代の日本の姿が、彼独自の真摯な観察眼によって活写されているはずであった。

そして、事実、「今日の日本」の原稿は存在した。これが英語による『日本史』としてイギリスで編纂・出版されたのである。

遺産相続人、甥ヘルマン

ケンペルは一七一六年十一月二日に亡くなるが、その九ヵ月前の二月三日に公証人を前にして遺言を認めている。それによれば、彼の亡き長兄ヨアヒムの子、甥のヨーハン・ヘルマンと、姪のマリーア・マグダレーナの二人が法定遺産相続人となっている。そして、蔵書や手記の類、外国での蒐集品、骨董類に関しては特に甥に遺贈することになっていた。というのも、甥のヘルマンは病気がちであった叔父ケンペルの助手として、法律の勉強を中断して『廻国奇観』の出版や計画中の「今日の日本」の編集を援助していたからである。

この甥はケンペル死後、医学の勉強に転じ一七一九年には医学博士の学位を取得し、叔父の後を継いでレムゴ郊外リーメで開業するが、評判があまり芳しくなく、浪費癖も手伝い、一七三六年に四四歳で独身のまま世を去っている。この間、ヘルマンは叔父の各旅先に関する報告や蒐集品、手記、スケッチ等の遺品を出し惜しみしつつも次々に競売にかけて処分する。この品々が、一八世紀におけるヨーロッパと日本間の情報交換の史料として貴重なものとなったのである。

イギリス人スローン卿

遺産相続人である甥のヨーハン・ヘルマンは、叔父が『廻国奇観』の出版等のため背負った借金を返済すべく一七二三年と二五年の二度にわたり、シュタインホーフ館や遺品の手稿、スケッチ、動植物標本、絵画、書籍等を競売にかけた。

これらラテン語やドイツ語原稿、その他も含めすべてではなかったが、旅行家にして医師、博物学者、またコレクターでもあったイギリス人ハンス・スローン卿がこの相続人から買い取った。

後に英国王立協会会長（The Royal Society for the Promotion of Science、職位一七二七 - 一七四一）も務めたスローン卿は、ケンペルの博士論文や『廻国奇観』をすでに知っており、ケンペルが持ち帰った、ヨーロッパには存在しない日本固有の珍しい品々について強い関心を抱いていた。

スローン卿はハノーファー選帝侯でもあるイングランド王ジョージ一世の侍医であったハノーファー在住のシュタイガータール（一六六六 - 一七四〇）を通じてケンペルの遺産相続人、甥にあたるヨーハン・ヘルマン・ケンペルのこと、および遺品の中身を調査させた。シュタイガータールはリーメに直接この相続人であるヘルマンを訪ね、遺品の詳細とそのリストをスローン卿に報告している。

シュタイガータールによれば、これらリストのうちで最も興味深いものは、日本とその周辺の地図および江戸の町や正確に書かれた日本の主要都市を結ぶ街道であり、動植物や魚の標本はそれほど珍しいものでもなく、毀損したものもあるというものであった⁷。

遺稿をめぐる謎

旅行記の類が市民の関心を引き、新しい情報への好奇心とそれを知る楽しみという文化の消費が始まった一八世紀イギリス市民社会の勃興時代、スローン卿の見るところケンペルの日本報告の影響力はかなり大きいものがあつた。

スローン卿は、特にケンペルの予告にあつた「今日の日本」の原稿のより詳しい調査を「英国王立協会」準会員でドイツの貴族に連なる、また卿自らも親交があり外国語にも堪能であつたツォルマン（- 一七四八）に依頼する。ツォルマンは、シュタイガータールを介してこの草稿を吟味し概要を英訳してスローン卿に宛て知らせている。一方、ツォルマンは、スローン卿に先立ちヘルマンと「今日の日本」について英独同時出版の契約を結び、原稿とこれに付随するスケッチや図を含め一七二三年二月九日にヨーハン・ヘルマンに二〇〇ターラーを支払い手に入れる⁸。

そして、ツォルマンは契約に従い、ケンペルの原稿の英訳作業に取りかかる。しかし、一七二四年五月からイギリス首相ウォルポール（在任

一七二一 - 四二) の秘書官としてパリに滞在したツォルマンにとって、「今日の日本」の編集・翻訳作業は両言語に通じていたとはいえ困難を極めた。入手原稿がケンペル手稿であれば、いわば標準ドイツ語ではないことから判読に時間がかかったであろうし、内容については未知の理解不可能なことが多くあったことであろう。さらに職務もあってなかなか捗らなかった。

このとき、ツォルマンに追い打ちをかけるように、突然スウェーデンへの転出話が持ち上がる。ついに、ツォルマンは翻訳を諦め、それまで要した費用の弁済に充てるためにも、「今日の日本」を買値の二〇〇ターラーでスローン卿に譲渡する。

さて、ツォルマンがヘルマンから取得したこの原稿が、ケンペル手稿をめぐる「なぞ」の発端となる。果たして、①ツォルマン取得原稿がケンペル自身の手稿であり、かつ内容はほぼ完成していたのか。この後、②スローン卿がこの原稿を手に入れ、卿の秘書ショイヒツァーが英訳する。これが「大英博物館」〈スローン・コレクション〉(SI 3060) に現存するものなのか。

一方、約五〇年後の一七七四年、③ケンペル手稿らしきものと、④甥ヘルマンの「写し」とみられる「清書」が、最後の遺産相続人、姪マリー・アマグダレーナの遺品として競売に付される。これら二原稿と〈スローン・コレクション〉原稿をめぐる謎が、ケンペルの「今日の日本」に疑問と変わらぬ関心を引き起している。

つまり、③は真実、ケンペル手稿であるのか、④は真実、甥ヘルマンが写した「清書」なのか。①の売却原稿と②の〈スローン・コレクション〉は同じものなのか。だとすると、ケンペル手稿が少なくとも二部存在したのか⁹。

スローン・コレクション

スローン卿は一方で、シュタイガータールを介しケンペルの「貴重な蒐集品」を一〇〇ポンド、四五〇ターラーを支払い一七二三年一二月に手に入れている。スローン卿はこれ以外にも、日本の学問や占星術・暦まで記した遺稿を三〇〇ターラーで、その他全て、日記や五〇点に及ぶ日本画や書籍、町の概略図や地図を六〇〇ターラーでヘ

ルマンから買い取る。

さらに一年後、一七二五年一二月にはケンペルの書簡、ペルシャやインドの風土病の診察記録、動植物誌、未完原稿、その他の遺品に対して一一二ターラーをヘルマンに支払い、ケンペルの遺産のほとんどを手に入れる。三回に亘りヘルマンに支払った買い取り総額は一一二ターラーと二ギニーに上った。これらの遺品はその後創設される「大英博物館」(The British Museum) に移管され、〈スローン・コレクション〉として今なお存在している。これでようやく、遺品の整理は終わったかにみえた。

ショイヒツァー英訳『日本史』

スローン卿は、ツォルマンから買いとった「今日の日本」の英訳を、同じく「王立協会」会員であった私設秘書の若きスイス人医師、ドイツ語に通じていたショイヒツァーに依頼する。ショイヒツァーは卿の要請に応え、当時可能な限りの文献を参照し、良心的かつ献身的努力を払ってこれを英訳する。

スローン卿はツォルマン宛書簡にショイヒツァーの努力について報告している。この「複雑かつ曖昧」な文体と表記を時代に見合う客観的事実を報告する文言に替えはしたが、決して「異国趣味」に迎合するような東洋の物語にはしていない、と。

ところで、ショイヒツァー英語版『日本史』は、五巻四九章から成っている。しかし、本来の目次には、四九章より二章少ない四七章しかなかった。ショイヒツァーが、冒頭第一巻第一章および第二章にシャム情報として、「バタヴィアからシャムへ、シャムから日本へいたる旅程およびわれわれの滞在中、そこで起こったこと」と「シャムの宮殿および王宮都市アユタヤの様子」を付加し、第一巻を全一章としたと考えられている¹⁰。このことはシャム情報のニーズや旅程の自然な進行を勘案してのことであったであろう。この際、ショイヒツァーはケンペルによるシャムまでの日誌やメモを参照し、彼の文体も含め忠実に再現したことであろう。

さらに、第四巻最終章の「制札、旅行手形、朱印状」について、付加したというよりも、長すぎ

ることを考慮して分割したとみられている。これで手稿より二章分増加した。ケンペルの未完成の図についてもスケッチや日本から持ち帰った品々を参考に補充した。その他にも、スローン卿が買い取った遺品のうちからも適切な部分を取捨選択し銅版画に作成するなどして挿入したであろう。これらすべての作業がショイヒツァー一人の責任で行われたとは考えられない。ツォルマンの介在はあったのか。スローン卿の指示はあったのか。ともあれ、ショイヒツァーは困難を極めたに違いない編纂作業を経て英訳『日本史』を完成する。

大英図書館東洋部門ユーイン・ブラウン女史は、一九九〇年に日本で開催された「ドイツ人の見た元禄時代・ケンペル展」において、スローン卿を初め英国王立協会所属の美術品収集家たちと親交があったヨーハン・ヤーコプ・ショイヒツァー（一六七二-一七三三）の息子であるカスパール・ショイヒツァーが『日本史』を英訳編纂した役割を大いに評価した。「ショイヒツァーがいなかったら私たちの知る『日本史』は存在しなかったであろう。ショイヒツァーは、ヨーロッパにおけるケンペルの通詞、今村源右衛門に等しいといっても過言ではない¹¹」とまで述べている。残念なことに、この英訳者である若き医師は二七歳でこの世を去っている。

出版予告と予約購読者

英国「王立協会」の新会長に任命されていたスローン卿は一七二七年四月二七日、ショイヒツァーに『日本史』の校了を宣言し出版準備が整った。その後すぐに、多くのイラストや銅版画が付された四つ折り二巻本がイギリス・ロンドンで刊行された。題名には内容の概略を紹介する長い付則が付け加えられた。ケンペル手稿入手後三年が経過していた。

スローン卿の思惑通り、事実、英語版『日本史』はイギリスばかりでなく、ヨーロッパ世界に反響を呼び起こした。『日本史』は、一六世紀に日本にやって来てキリスト教の布教に携わったイエズス会士のカトリック的観点からの報告とは全く異なり、科学的観察と分析による客観性を備えた百科全書の記述にも等しい内容を有していた。一部付加や書き換え、削除があったにせよ、ショイ

ヒツァー英訳版ケンペル『日本史』が一八世紀ヨーロッパの日本観の新たな形成・定着に寄与したことについてはいささかの揺るぎもない。

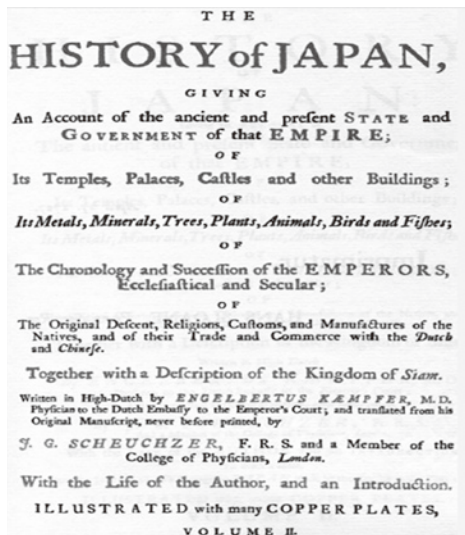
ケンペルの原稿をもとに、イギリス社会のニーズを顧慮して一部書き換えや補完がなされること、それ自体はさほど問題とされるような行為ではなかった。未知のアジアの情報を、それも新奇なそれを報告することが時代の要請に応えるものであったし、卿の意向でもあったであろう。しかし、なによりもこの『日本史』の存在がヨーロッパと日本にとって、重要な時代の歴史的記録となるとともに、東西世界の思想の展開に少なからぬ影響を与えたことの方がより大きな意義をもった。

ヨーロッパ大陸諸国に先駆けて市民社会が誕生し、コーヒーハウスやサロンでの文化消費が活発であったイギリスでは、出版物の広告が売れ行きも左右した。『日本史』も、『廻国奇観』と同じく、当時知識人に広く読まれていたパリの文芸批評誌『ジュルナル・デ・サヴァン』一七二六年一〇月号に出版予告された。その内容は旅行者ケンペルの経歴と『日本史』概要であり、総頁数二つ折り版一〇〇枚以上、挿絵四〇枚とあり、翌年一〇月号は購買予約が好調である旨、伝えている¹²。

一〇ターラーと高価な値段がしたこの『日本史』初版の予約者名簿を見ると、一六二人の名前が知られる。そのうち四九名は「英国王立協会」会員であり、その他七八名の内訳は、医者が二六名、聖職者が一二名、大地主が一名であり、少なくとも实际的日本情報を欲した知識人と資本家であったことがわかる¹³。医学、宗教、奢侈品等に関する情報をこれに求めた人が多くいたことは、ケンペルの「日本」報告に有益かつ実地的な知識を期待したと見てよい。



(シヨイヒツァー編纂『日本史』1727)



(『日本史』表紙裏面に1727年4月27日とある)

ある日本の鎖国」、「鍼術による疝気治療」、「シナおよび日本の艾灸」、「竜涎香について」、「日本の茶の話」の六篇を取り出し付加したことである。

なぜこれら論文を付加したのであろうか。ここにはおそらくスローン卿の意向が働いたに違いない。ケンペル報告を単調な旅行記とせず、日本独自の病気の治療法や薬草、特異な技術、政治状況を選択し本文に付加することにより、イギリス市民社会の趣向・関心に相応しい情報の提供、ひいては当時の大陸ヨーロッパの評判を呼び覚まし読者を獲得すること、いわば市民の文化消費の時代とそのニーズを勘案したためであろう。

『日本史』発行の二年後、一七二九年にはオランダ語訳が『日本紀行』という題名によりアムステルダムで出版され、フランス語訳がツォルマンと既知の間柄であったデ・メゾー（一六七三? - 一七四五）により具体的実際的内容を示す題名『日本の歴史、自然、住民、経済』が付され、同年ハーグで出版される。四年後一七三三年にはオランダ語版が再販され、フランス語版は七年後デュ・アルド（一六七四 - 一七四三）の『中国史』の付録として改編・挿入される。

そして、このフランス語から、不完全な形でドイツ語に重訳されドイツ北部の町ロストックで、いわばドイツ語版が出版されるのがようやく一七四九年のことである。ドイツにおける日本への関心の度合いと国家の有り様がわかる。

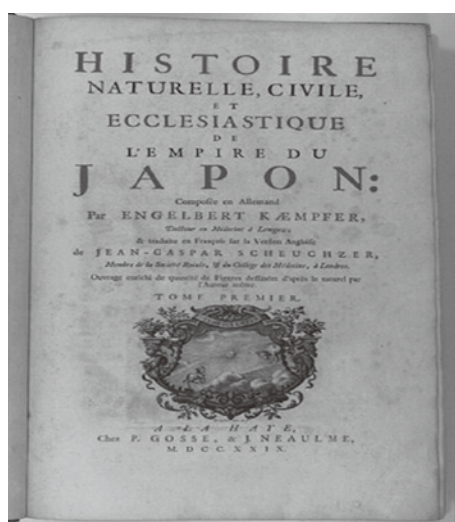
『日本史』の付録

ヘルマンからツォルマンの手を経て、スローン卿に渡り、シヨイヒツァーが編纂した英語版『日本史』が、ケンペルが予告したところの「今日の日本」そのものではもちろんない。しかし、これが少なくともケンペルの遺稿である「今日の日本」の内容を踏襲するものであることは間違いない。原稿をめぐる「なぞ」や誤訳、スケッチの銅版画の出来栄以上に、刊行されたこと、それ自体の意義の方がはるかに優る。

一方、シヨイヒツァー『日本史』編纂上、特筆すべきことは、『廻国奇観』掲載の日本関係論文から「日本における製紙法」、「もっともな理由の



(オランダ語訳日本史「日本紀行」1733年版)



(フランス語訳『日本史 歴史、自然、住民、経済』1729年)

ケンペル手稿の発見

ショイヒツァー編纂『日本史』が公刊された後、約五〇年の時を経て新たな事実が判明する。ケンペルの遺品の相続人であった甥の医学博士ヨーハン・ヘルマンが一七三六年に亡くなると、この甥のもとにあったケンペルの遺品は、今度は唯一の相続人である姪のマリーア・マグダレーナが相続するところとなった。そして、この姪も一七七三年に亡くなると、その年一〇月にケンペルの蒐集品や書籍が、束にして五〇ないし六〇個分レムゴで競売に付されたのである。

その中に、再度ケンペルの「今日の日本」と思しき二通りの原稿が発見された。ケンペル家の図書管理人にしてレムゴ市長であり、出版業を営んでいたヘルビングが、レムゴのマイヤー書店のた

めにそれら遺品を買い取り、ベルリン在住の、当時有名な地理学者であったビュシング（一七二四 - 一七三九）にまず鑑定を依頼した。ここに、ケンペルと同郷の若きプロイセンの官吏、後のベルリン・フンボルト大学教授ドームが介在することになる。レムゴのマイヤー書店の娘、エリーザベトは後にこのドームと結婚する。ドームは当時カッセルの高等教育機関であるコレギウム・カロリーヌムの地理・歴史・経済学の教授であり、一七七九年にプロイセン官吏となる。

一八世紀ベルリンの啓蒙主義者にしてプロイセンの官吏となったドームが、ケンペル原稿の調査鑑定と整理の依頼を受けたことが、ケンペルの日本報告に新たな息吹を吹き込むことになる。

ビュシングとドームの鑑定

ビュシングは一七七三年に主宰していた「週報」（Wöchentliche Nachrichten）に、発見された二つの原稿の鑑定結果を報告している。それによれば、うち一つの手稿には次のタイトルがふされている。「日本の歴史、この国の興味深い古代と現在の国家形態、有名な寺院や宮殿、城塞、その他の建築物、多くの金属や鉱物、木々、動植物、鳥や魚、また年代記、歴代皇帝、原住民、信仰、慣習、職人、現地民と外国人、オランダ人と中国人の交易、およびシャム王国紀行。」そして、標準ドイツ語で清書されていることから判断して、エンゲルベルト・ケンペルの甥のヨーハン・ヘルマンが書き写したものである¹⁴、と。

もう一方の手稿は、タイトルもなく、ケンペルのオリジナルと思われる。それはケンペルが旅先から兄に宛てた手紙とも、図書館にあった手紙とも筆跡が一致していることから、そう信じるに足る、との見方を示した。また、ビュシングは五巻からなる『日本史』の内容についてはショイヒツァーのことは引用するかたちで紹介している。

一方、ドームはこのビュシングの鑑定を一七七四年三月一日付マイヤー書店の出版報告「ケンペルの日本紀行の原稿について」のなかで是とし、これを補完するかたちでいくつかの注を加えている。

甥の清書は明確かつはっきりと読みやすく写され、叔父の手稿と完全に同じものとなっている。両者の間にはほんのわずかな違いしか見いだせない。時折、叔父の手稿にあるが、甥のものには抜け落ちている箇所があることに気がついた。しかし、これがなくとも、前後関係が十分わかる。また二重に存在している箇所、強調されている箇所、変更されている箇所もある¹⁵。

ビュシングとドームは、その一つがケンペル手稿であり、もう一つが甥ヘルマンの「写し」だと鑑定する。協力者の存在の可能性には触れていない。ビュシングもドイツ語版編纂者となるドームも、ケンペル手稿の真実性については全く疑いをもたなかったのであろうか。果たして、この鑑定が正しいとすると、〈スローン・コレクション〉の原稿の存在はどう解釈すべきなのか。

ドームがこれら競売原稿に基づいてドイツ語版『日本の歴史と紀行』を編纂したが、これら二つの原稿はともに、その後、残念なことに行方不明となってしまった。謎が深まり、テキストに推測の余地があることは、その真偽のみならずケンペルの日本理解にも疑問を抱かせることになる。もちろん、このことは啓蒙主義ヨーロッパの時代思潮とも関連する。

ドームがドイツ語版『日本の歴史と紀行』を刊行するのが、上三巻が原稿発見の四年後一七七七年、下二巻が一七七九年のことであり、一七二七年にショイヒツァーが英語版『日本史』を公刊してから五〇年、ケンペル没後六〇年あまりの時を経ていた。

ドームの考証

ドームはケンペルの「日本」の編纂者として、自分が偏見や驕りのない真正な学者的姿勢をもってしたことを強調した。たとえば、「はしがき」の「二、著作の細目」において次の4原稿を比較考証している。①「ケンペル手稿」（左上段）、②甥によるその「清書」（左下段）、④「自分の校訂版」（右上段）、③「英語版」（右下段）。

4) Aus dem ersten Kapitel des dritten Buchs.

Handschrift des Oheims.

Wie unter allen asiatischen Völkern und Heiden, also ist unter diesem Volke die Freiheit des Glaubens, so lang er der weltlichen Regierung nicht schädlich fällt, jederzeit zugelassen worden. Wannhero außer der einheimischen und in diesem Lande entsprossenen Religion noch verschiedene andre streitige Religionen alhier platz genommen haben. Man hat derselben in unserm Seculo vier gezählt, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die Wage gehalten; als Sinto, das ist, der Weg einheimischer Götzen, u. s. w.

Mein Text, pag. 251.

Die Freiheit der Religion und des Glaubens ist unter allen heidnischen Völkern Asiens zu allen Zeiten völlig frey und unbeschränkt gewesen; so lange diese Freiheit nur nicht irgend nachtheilige Folgen für den Staat befürchten lies. So auch in Japan. Daher ist es verschiednen fremden Religionen sehr leicht geworden, sich neben der von den ältesten Zeiten her herrschenden und (wie die Japaner behaupten) hier entsprossenen Religion einzubringen und in dem Reiche auszubreiten. Man hat in unserm Jahrhundert besonders vier Hauptreligionsparteyen u. s. w.

Handschrift des Neffen.

Wie unter allen asiatischen Heiden, also ist unter diesem Volke die Freiheit des Glaubens, so lange Er dem weltlichen Regiment nicht schädlich und nachtheilig fällt, jederzeit zugelassen worden. Wannhero außer der einheimischen und in diesem Lande entsprossenen Religion, noch verschiedene andre streitige Religionen alhier platz genommen haben. Man hat derselben in unserm Seculo 4 gezählt, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die Wage gehalten.

Schönheitsreifer Text, pag. 203.

Liberty of Conscience, so far as it doth not interfere with the Interest of the secular Government or affect the peace and tranquillity of the Empire, hath been at all times allowed in Japan, as it is in most other countries of Asia. Hence it is that foreign religions were introduced with ease and propagated with success to the great prejudice of that, which was established in the country from remotest antiquity &c.

(この箇所は第三巻第一章からの引用である。)

あらゆるアジアの民族や異教徒の間では、つまりこの民族の下でも政治に害を及ぼすものでない限り、いつの時代にも信仰は自由であった。外来宗教やこの国本来の宗教、さらに異教も根付いていた。この時代には四宗教があげられる。その大体の信徒数はいつの時代も同じ程度であった。神道が伝来の尊崇対象である。仏道がシャムと清を経由して伝来した偶像崇拜の道であり信仰である。儒道が道徳家あるいは哲学者の道であり、デウスあるいは切支丹道がキリストの神の道である。(翻訳「はしがき」XLVII頁、ドーム版285頁)

ドームは、ここにおいて①「ケンペル手稿」と②「甥の写し（清書）」との間にはほとんど違いがないこと、また、自分の校訂版においても表現の明確化・強調（in diesem Lande → So auch in Japan へ等）があるにしても、単なる字句の訂正に過ぎないことを提示している。しかし、スローン卿に売却された原稿については大英博物館〈スローン・コレクション〉の調査が不可能であったこともあり、ショイヒツァー英訳はそのまま参照したに過ぎない。

そもそも、ドームはケンペル手稿とショイヒツァー英訳の原典は同一との前提に立っている。そして、ショイヒツァー英訳版と手許にあるケンペル手稿および甥の清書とを比較し、ショイヒ

ツアーにはかなり意識に近い箇所やケンペルの考えを敷衍し過ぎる箇所があることも確かに指摘している。

しかし、ことさら問題としていない。宗教と政治との関係など、時代精神においてドームもまたショイヒツアーと考えを同じくしたためと推測できる。ただ、ショイヒツアー版を補足する注書きを多くした。そして、ドームは自分のドイツ語版をショイヒツアーのものと区別するためか、書名を英語版ともそのオランダ語訳とも異なる、あるいは両者を合わせた『日本の歴史と紀行』とした。ケンペル手稿の「今日の日本」とも異なる。そして、「刊行者の序文」に、「学者や玄人はだしを満足させ、批判的立場から要求されているものや時代的欲求を併せて満たす¹⁶⁾」ことに自分の編集の原理原則があると述べた。

なぜ『日本の歴史と紀行』という題名にしたのであろうか。時代が五〇年も隔たってしまったからか。この時代、歴史とか、医学とか、東洋の動植物とか、ヨーロッパに存在しない新奇なものが人々の関心を引き起こすキーワードであったためか。「時代的欲求」とは、たとえば、内容について自分なりの解釈と時代精神とに基づき、英語版『日本史』とは異なる編纂方向を示すためであったのか。

ドームの考証が、彼の言うところの真摯な編集者の姿勢であったか否かはともあれ、基本的には啓蒙の時代精神に適する尺度が適用されたことは確かである。また、古いドイツ語表記や文字については、それらを、いわば当代風のドイツ語に改めている。この意味で、ショイヒツアーの編纂方法に同意していた。

厳密この上ない良心と寸分違わぬ精確さをもって、ケンペルの言わんとした意味と内容を少しも変えることなく、決して何事も付け加えず、何事も削らず、しかしまたこのままの内容を、ただ歴史的事実が損なわれない限りにおいて、なるべく読みやすくかつ洗練された文体で提供する¹⁷⁾。

ドームの編纂方法

合理主義の洗礼を受けた啓蒙主義者ドームに

とって、ケンペルの報告の相対的多元的視点による日本評価は満足できるものではなかった。ドームは、ケンペルが採用した資料を系統的に網羅する百科全書的内容に、少なくとも内容がよく吟味できるようより詳細に注を付そうとした。日本にかんして得られている知識を十分勘案するとともに、できる限りその批判的見解をも併せて提示することにより、ヨーロッパ人あるいは自分の立場から見て普遍と特殊、肯定できるところと批判されるべきところが明確になるようにしたいと考えた。

たとえば、ドームは『日本史』所収の付録論文六篇をそのまま『日本の歴史と紀行』にも踏襲掲載した。なぜだろうか。本来、ケンペル手稿にも甥の清書にもなかったはずである。そして、ケンペルの「国を鎖している……」論と「茶の栽培」について、あえて「編者のあとがき」を付し批判あるいは補足している。時代の合理主義の批評軸を明確にするためであろうか。

『日本の歴史と紀行』の刊行

出版のためには大変な資金が必要であった。ドームは、一七七四年一〇月八日付けケンペルの「日本」の「出版予告」のなかで、損失を出さないためには少なくとも二〇〇人の予約購読者が必要であり、その価格はルイ金貨二枚あるいは一〇ライヒスターラーである、と報告している¹⁸⁾。予約価格は、当初概算通り一〇ライヒスターラーであったが、当時、牛肉八四キロを買えるほど、また六五〇キロのパンが買える、三三〇キロのパンを焼くことができるほどの資金に相当した。使用人一〇カ月分の給与にも相当するほど高価であった¹⁹⁾。もっとも、銅版画の制作費を考慮すると『廻国奇観』公刊の方が、『日本の歴史と紀行』をはるかに上回る高額の資金が必要とされたであろう。

ともあれ、ドームは『ケンペルの日本紀行にかんする報告』の最後に、この時点における四二人の個人と機関の予約者名を上げている。

レムゴのマイヤー書店によると、このドーム編纂『日本の歴史と紀行』の予約購読者が二四六名であり、その内訳は八〇名の個人、六〇の書店、五箇所の研究機関であった。

ロシア、デンマーク、スイス、オーストリアの予約者もいたが、彼らは学者や官吏、商人であった。このことは、ラテン語による『廻国奇観』や英語版『日本史』の場合と比較し、アジアの医学や植物よりも商業上の利益、国家や社会体制等、実際の事物に関心を持つ者が多くいたことを示している²⁰。



(ドーム 編集『日本の歴史と紀行』上巻 1777 年、Geschichte und Beschreibung von Japan. Erster Band. 1777)

〈スローン・コレクション〉と「今日の日本」

ところで、ボダルト＝ベイリー女史は〈スローン・コレクション〉を調査し、一九九九年に改めて『ケンペルの日本』を公刊する²¹。そして、この調査とショイヒツァー版『日本史』およびドーム版『日本の歴史と紀行』とを比較して判明した、例えば単語の読み誤りなどの具体的事例を指摘している。なぜか原典の考証については行っていない。

たとえば、ケンペルのドイツ語手稿をもとに英訳したショイヒツァーの『日本史』については、その翻訳作業の困難はドイツ語だけの問題ではなかった、と見る。ショイヒツァーにとって日本は全く未知であり、知識と情報の不足はときおり誤訳を招く。ボダルト＝ベイリー女史によると、ショイヒツァーの翻訳には「最後の二ページだけでも間違いや不十分な訳が一〇箇所」もあり、さらに、ケンペルの論調までもが変化させられ、「特に日本の生活習慣や日本人の信仰の篤さに対するケンペルの称賛は弱められ、批判はむしろ誇張されて

いる²²」という。

一方、ドームにかんしても、「与力」とは特別な訓練を受けた「歌 (singen)」の達人ではなく、「格闘 (ringen)」の達人であが、ドームは「与力」についての知識が全くないため、手書きの s と r の文字とを読み違い完全に誤訳してしまった²³、と。ドームは、ケンペル手稿においても甥ヘルマンの清書においても、自分が理解できない箇所はショイヒツァーの英訳をそのまま置き換える他はなかったであろう。その他にも意味が理解できない箇所は削除したり、改変したりと、さらに挿絵について大英博物館のオリジナルを利用できなかったこともあり、ショイヒツァーの『日本史』掲載のものをそのまま借用せざるを得なかった。ボダルト＝ベイリー女史は、ドームの鑑定結果の曖昧さ、テキスト批判の不十分さを指摘している。

女史はショイヒツァーとドームにかんして、ともに翻訳や単語の解釈の誤りを指摘しているばかりではない。一八世紀ヨーロッパにおいて重要かつ論争課題であった宗教的寛容の精神を小さく評価していること、儒教の教えをキリスト教の十戒と比較したこと、当時不穏当と解釈されるケンペルの記述は容赦なく削除されていること、一方日本の神道には宗教としての教義・信仰箇条が欠如しているとの見方などをあえて紹介している。信仰とキリスト教ドグマ、教会と聖職者との確執、宗教と政治に関する課題においてプロテスタントとカトリック双方への配慮が認められる、という。

ところで、カトリックの立場ではあったもののシャルルヴォア (一六八二 - 一七六一) は著書『日本の歴史と地誌』 (一七五四) において、ケンペルの「日本史」を大いに参照した。「従来の歴史に欠けているものはほとんど全てこの書に見いだされ、従来の歴史に見られるものはこの書には全く存在しない²⁴」と。このシャルルヴォアのことばには、宗教史から史料に基づく客観的政治社会史を承認せざるを得ない、啓蒙主義時代の宗教思想の変化を認めざるを得ない心情が吐露されている。日本の宗教的雰囲気は啓蒙主義の宗教的寛容に何らかの影響を与えたとも見るができるのではなかろうか。

ケンペル手稿の謎

ところで、ドームが本物と鑑定した①ケンペルの手稿と②甥ヘルマンによるその清書の二者と、現在も〈スローン・コレクション〉に現存する原稿、この三者間の異同やその真実性の鑑定については今もってなお議論を呼んでいる。一九九〇年に東京で開催された「ケンペル生誕三〇〇年記念シンポジウム」において、ボダルト＝ベイリー女史やイギリスの歴史学者マサレラ博士らが、「ビュシングとドームの鑑定」に疑問を呈している。本来、ケンペル手稿には存在しない、ショイヒツァーにより付加されたといわれる冒頭第一巻第一章のシャムまでや第四巻第七章の分割による二章分の増加については、ビュシングもドームも全く触れていない。競売原稿の片方が、もし、ケンペルのオリジナル手稿であるとの判断をくだしたならば、なおのことこの冒頭部分の欠落について言及があつてしかるべきであろう。

ケンペル研究者でもあるマサレラ博士がツォルマンと甥ヘルマンとの間の手紙のやり取りを調査分析したところによると、ツォルマンとヘルマンとの間には、ケンペルの「今日の日本」について英語とドイツ語による同時発刊が約束され、ツォルマンの英訳完成後、速やかに原稿を返却することになっていた、という。しかし、契約通りに事は運ばなかった。

マサレラ博士の結論は、ケンペル原稿はもともと二部存在したというものである²⁵。この時代、著者が原稿を二部作成することは、原稿が行方不明になる可能性を顧慮したものであつて、特別なことではなかった。ヘルマンの売却原稿は、従つてケンペル自筆原稿であり、ツォルマンとの間で交わされた契約に従い、ショイヒツァーは英訳後、原稿の写しをヘルマンの下に返却した、という。競売に付された再発見の二種類の原稿は、本来のケンペル手稿と英訳後ショイヒツァーにより返還されたその「写し」である。だとすれば、〈スローン・コレクション〉保存の原稿がケンペル手稿のオリジナルということになるが。

ボダルト＝ベイリー女史編纂による『ケンペルの日本』刊行に続き、この後、九州大学のミヒエル教授やドイツ・オルデンブルク大学のハーバート博士らドイツ人研究者らの協働により、改

めて大英博物館蔵〈スローン・コレクション〉のケンペル原稿等の調査が行われた。この結果に従い、二〇〇一年から二〇〇三年にかけてミヒエル博士らの編纂による歴史批判版『今日の日本』（一卷二分冊）を含む「ロシア」、「ペルシャ」、「マラバル紀行」、「書簡」の全六巻からなる『ケンペル全集』が刊行された。



『ケンペル全集』「今日の日本 1/1,1/2」(宇都宮大学図書館)

歴史批判版『ケンペル全集』

ミヒエル博士が〈スローン・コレクション〉を調査した結果によれば、英訳者ショイヒツァーが基にしたドイツ語原稿には、甥の筆跡とケンペル手稿部分の外、複数の筆跡が認められ、さらにショイヒツァーが付加した部分がある。内容には『廻国奇観』との重複部分も多く存在している。したがって決定稿が確定できない、という。いずれにしろ真実はやはり推測の域をでない。

ミヒエル博士とターウィル博士は〈スローン・コレクション〉、英語版『日本史』、ドーム版『日本の歴史と紀行』の同箇所を比較するとともに筆跡鑑定の結果を次のように報告している。

タイトル題名『今日の日本』……………	甥
第一巻 タイトル、目次（五および六章は後に挿入）……………	甥
序……………	甥
…………… ショイヒツァーにより付加された章	
第一章……………	甥
…………… ショイヒツァーによる書き込み	
第一章テキストの続きと終わり……………	甥
…………… ショイヒツァーによる拡大	
第二章……………	甥

第三章……………	甥
……………筆写人1	
第四章～第一〇章……………	筆写人1
第二巻……………	タイトル、目次、第一章～第五章
……………	ケンペル手稿
第六章……………	甥
第三巻	タイトル、目次、第一章～第七章…
甥	
第四巻	タイトル、目次、第一章～第九章…
甥	
第一〇章……………	欠
第五巻	タイトル、目次、第一章～第六章
……………	ケンペル手稿
第七章……………	甥
第八章～第一章……………	筆写人2
第十一章途中～第一五章……………	甥

(Michel 1/2, S.41～44)

この調査結果を見る限り〈スローン・コレクション〉は甥の筆跡が大部分を占めることから、甥の写しである可能性が高い。一方、第二巻および第五巻にケンペル手稿が混在している。だとすれば、レムゴで競売に付され、ビッシングとドームがケンペル手稿だと確認した原稿には、これらの部分が欠けていると見るのが妥当である。しかし、甥ヘルマンが健康がすぐれないケンペルの口述を筆記していたことを考慮すると、マサレラ博士が指摘するようにケンペルの改稿原稿がもう一部存在し、それが甥の口述筆記であるところの〈スローン・コレクション〉である可能性も考えられる。

ミヒエル博士の考証

ミヒエル博士は①〈スローン・コレクション〉、②ドーム鑑定による「ケンペル手稿」と③「甥の清書」、そして④ドーム自身の校訂版、この四者間を比較し、原典の核心に迫ろうとしている。つまり、ドームには調査不可能であった〈スローン・コレクション〉が考証の対象となっている。

次の箇所は、ドーム版での引用箇所と同じ第三巻第一章部分である。

(スローン) (ケンペル手稿) (甥の清書)

BL, SI 3060, fol. 145r (Buch 3, Kapitel 1)	„Handschrift des Oheims“	„Handschrift des Neffen“
Wie unter allen Asiatischen Völkern und Heiden also ist unter diesem Volcke die freyheit des glaubens, so lange er der Weltlichen Regierung nicht schädlich fället, jeder Zeit zugelassen worden. Wannhero ausser der Einheimischen und in diesem lande entsprossenen Religion, noch verschiedene andere streitige Religionen alhier Platz genommen haben. Man hatt derselben in unserm Seculo 4 gezehlet, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die wage gehalten; alb: Sin to, das ist, der weg einheimischer götzen.	Wie unter allen Asiatischen Völkern und Heiden, also ist unter diesem Volke die Freyheit des Glaubens, so lang er der weltlichen Regierung nicht schädlich fället, jederzeit zugelassen worden. Wannhero ausser der einheimischen und in diesem Lande entsprossenen Religion, noch verschiedene andre streitige Religionen alhier platz genommen haben. Man hat derselben in unserm Seculo vier gezählt, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die Wage gehalten; als Sinto, das ist, der Weg einheimischer Götzen, u. s. w. ^a	Wie unter allen asiatischen Heiden, also ist unter diesem Volke die Freyheit des Glaubens, so lange Er dem weltlichen Regiment nicht schädlich und nachtheilig fället, jederzeit zugelassen worden. Wannhero ausser der einheimischen und in diesem Lande entsprossenen Religion, noch verschiedene andre streitige Religionen alhier Platz genommen haben. Man hat derselben in unserm Seculo 4 gezehlet, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die Wage gehalten. ^b
a. GBJ, Band 1, Einleitung des Herausgebers, XLVII.		
b. GBJ, Band 1, Einleitung des Herausgebers, XLVII.		

(Werke 1/2, S.59) (下線はミヒエル博士による)

第一に、ミヒエル博士は〈スローン・コレクション〉(左)、ドーム版から「ケンペル手稿」(中央)、同じくドーム版から「甥の清書」(右)の三者を比較した。確かに前二者と「甥の清書」との間には一致しない表現上の小さな部分が存在する。たとえば、Regierung 前二者と Regiment 後者のように。しかし、意味の違いは小さい。

第二に、同箇所について〈スローン・コレクション〉(左)、英語版(中央)、ドーム校訂版(右)の三者を比較すると、次のように英語版とドーム校訂版とがほぼ同一であるが、〈スローン・コレクション〉とはかなり違いがある。

(スローン) (英語版) (ドーム版)

BL, SI 3060 (Buch 3, Kapitel 1)	„History of Japan“ (1727), Band 1	„Geschichte und Beschreibung von Japan“ (1777), Band 1
[fol. 145r] Wie unter allen Asiatischen Völkern und heyden also ist unter diesem Volcke die freyheit des glaubens, so lange er der Weltlichen Regierung nicht schädlich fällt, jeder Zeit zugelassen worden. Wannhero ausser der Einheimischen und in diesem lande entsprossenen Religion, noch verschiedene andere streitige Religionen allhier Platz genommen haben. Man hatt derselben in unserm Seculo 4 gezehlt, die an Vielheit der Nachfolger eine der andern zu Zeiten die wage gehalten; all: Sinto, das ist, der weg <u>einheimischer götzen</u> . Buddso <u>der weg oder glaube an ausländische</u> von Siam und Sina eingebrachten abgötter. Sjuto, der weg der <u>Moralisten</u> oder Philosophen Deivus oder Kiristando, das ist Gottes und Christi Weg.	[S. 203] Liberty of Conscience, so far as it doth not interfere with the Interest of the secular Government, or affect the peace and tranquility of the Empire, hath been at all times allow'd in Japan, as it is in most other Countries of Asia. Hence it is, that foreign Religions were introduc'd with ease, and propagated with success, to the great prejudice of that, which was establish'd in the country from remotest antiquity. In this last hundred years there were chiefly four Religions, considerable for the number of their adherents, to wit. 1. Sinto, the old Religion, or Idol-worship, of the Japanese. 2. Buddso, The worship of foreign Idols, which were brought over into Japan, from the Kingdom of Siam, and the Empire of China. 3. Sjuto, The Doctrine of their Moralists and Philosophers. 4. Deivus, or Kiristando, is as much as to say, the way of God and Christ, whereby must be understood the Christian Religion.	[S. 251] Die Freiheit der Religion und des Glaubens ist unter allen heidnischen Völkern Asiens zu allen Zeiten völlig frey und unbeschränkt gewesen; so lange diese Freiheit nur nicht irgend nachtheilige Folgen für den Staat befürchten lies. So auch in Japan. Daher ist es verschiednen fremden Religionen sehr leicht geworden, sich neben der von den ältesten Zeiten her herrschenden und (wie die Japaner behaupten) hier entsprossenen Religion, einzubringen und in dem Reiche auszubreiten. Man <u>hat</u> in unserm Jahrhundert (dem siebzehnten) besonders vier Hauptreligionspartheyen <u>gezählt</u> , die in Absicht der Zahl ihrer Anhänger ohngefehr sich gleich seyn mögen, nemlich: 1) Sinto, das heist, <u>der Weg</u> oder die Verehrung <u>einheimischer Götzen</u> . 2) Buddso, das heist, <u>der Weg</u> oder die Verehrung <u>ausländischer</u> , von Sina und Siam herübergebrachter Götzen. 3) Sjuto, die Lehre der Sittenlehrer und Philosophen. 4) Deivus oder Kiristando, welches Gottes und Christi Weg bedeutet.

(Werke 1/2, S.63) (下線はミヒエル博士による)

あらゆるアジアの民族や異教徒の間では、つまりこの民族の下でも政治に害を及ぼすものでない限り、いつの時代にも信仰は自由であった。外来宗教やこの国本来の宗教、さらに異教も根付いていた。この時代には四宗教があげられる。その大体の信徒数はいつの時代も同じ程度であった。神道が伝来の尊崇対象である。仏道がシャムと清を經由して伝来した偶像崇拜の道であり信仰である。儒道が道德家あるいは哲学者の道であり、デウスあるいは切支丹道がキリストの神の道である。(翻訳) (M1/2, S.63)

ミヒエル博士の鑑定によると〈スローン・コレクション〉の第三巻第一章部分は甥ヘルマンの筆跡であることから、〈スローン・コレクション〉と「甥の清書」との間にはほとんど違いがないことは納得がいく。しかし、〈スローン・コレクション〉とドーム校訂版との間の異動が大きく、一方、ショイヒツァー英語版とドーム校訂版とはほぼ一致している。ここにマサレラ博士が指摘するようにビュシングとドームの鑑定に疑問が生じる原因の一端がある。

ミヒエル博士の鑑定にしたがい、①〈スローン・コレクション〉は大部分が甥ヘルマンによる清書であるならば、スローン卿への売却原稿が「ヘルマンの清書」である可能性が高い。ケンペル手稿

が存在するのは、判読不可能部分あるいは清書の未完成部分をヘルマンが送付した、との推測も成り立つ。

つまり、レムゴで競売に付された二つの原稿は、一方がケンペル手稿のオリジナルであり、もう一方が「甥の清書」であることに疑問が生じる。甥ヘルマンの清書は存在しないことになる。ヘルマンはもう一部清書原稿を作っていたのであろうか。ともあれ、レムゴでの競売原稿が行方不明となってしまった以上、原典の問題に決着をつけることは困難である。事実、ミヒエル博士は〈スローン・コレクション〉のうちに第三者の筆跡も確認している。

ひとつの可能性

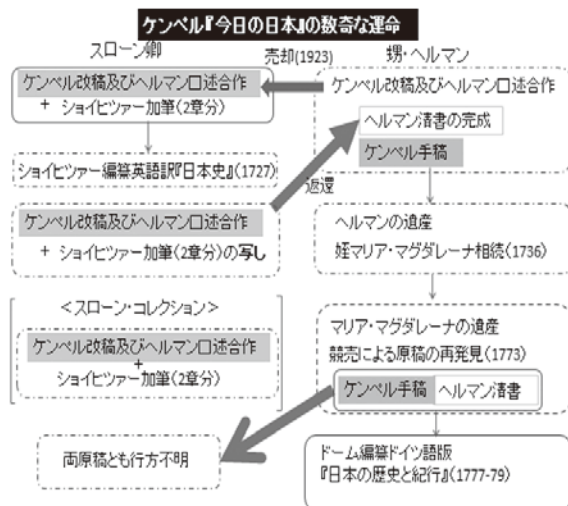
ケンペル手稿に関する尽きない謎に挑戦する意味で、筆者もここで一つの可能性を提起しておこう(図参照)。ケンペル手稿から「写し・清書」が二部作られたというよりも、売却原稿はケンペルの改稿とヘルマンの口述筆記との合作と考えることもできるのではなかろうか。そして、ケンペル手稿のオリジナルは甥の手許に保管された。

本来、①ケンペル手稿「今日の日本」と、②ケンペル自身の手による改稿。つまり、その際、甥ヘルマンがケンペルの口述に従い筆記した部分が混在した第二の「今日の日本」の二部が存在した。さらに、③甥ヘルマンが写しとった「清書」、当初三種の原稿が存在していた。甥がスローン卿へ売却した原稿は②の混合原稿であり、この中にはケンペル手稿の判読不可能部分が含まれていた。これが〈スローン・コレクション〉に現存するものである。競売原稿は、ケンペル手稿のオリジナル①と甥の清書③である。ケンペル手稿のオリジナルには、確かにショイヒツァー付加部分は存在しなかった。マサレラ博士が述べるように、ショイヒツァーから返還された一部写しを加えヘルマンが自分の清書を完成させた。

ドームはケンペル手稿のオリジナルに基づき『日本の歴史と紀行』を編纂刊行することを心がけたものの、より完全な、また英語版との整合性を考慮し、甥の清書を基に冒頭部分をそのまま付加・補完し、第四巻の分割も継承した、と考えられないであろうか。

ともあれ、ケンペル手稿「今日の日本」の原典が確定できないミステリーが今日にいたってなお続いている。このことが、ケンペルと「日本」について、われわれにとっての魅力ある研究課題のひとつとなっているのである²⁶。

【ケンペル『今日の日本』の数奇な運命一仮説として】



【付記】

本研究ノートは、科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般）、研究課題名「ケンペル研究の新展開 ―日本とドイツの協力による総合研究」（課題番号 16K02555）平成 28～30 年度）のための予備的作業である。

【本書は次の二つのテキストに拠る】

一、Christian Wilhelm von Dohm: Engelbert Kämpfers Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers, hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm. Erster Band. Lemgo. 1777. Zweiter und letzter Band. Lemgo, 1779. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung im Lemgo erschienenen Originalwerks. Mit einer Einführung von Hanno Beck. Stuttgart 1964.

今井 正訳『日本誌 - 日本の歴史と紀行』（霞が関出版）、一九九六年初版、第二刷の翻訳、解説

および注釈を参照。なお、訳文については適宜修正させていただいた。

一、Engelbert Kaempfer, Werke 6 Bde. München 2001-2003.

Werke 1/1, 1/2. Heutiges Japan, Hrsg.v. Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel. München 2003.

【引用・参考文献】

一、引用については、ドーム版の今井訳とミヒエル版の頁を同時に記した。（例、上巻…頁。M1/1, S. …）

一、文献引用頁、参考文献については本文末注に記した。

一、本文中の『廻国奇観』を含む「日本誌」関連図版については、「ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展」（1990）60-62 頁から引用させていただいた。

【ケンペルの手稿「今日の日本」の公刊】

一、『日本史』（The History of Japan, 1727）スイス人ショイヒツァー編纂。英語、ロンドン。

一、『日本紀行』（De Beschryving van Japan, 1729, 1733）英語版『日本史』のオランダ語訳、阿姆斯特ダム。

一、『日本の歴史、自然、住民、経済』（Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'empire du Japon. 1729）英語版『日本史』のフランス語訳、オランダ・ハーグ。

一、『日本の歴史と紀行』（Die Geschichte und Beschreibung von Japan. Erster Band, 1777. Zweiter Band, 1779）、ドイツ人ドーム編纂、ドイツ語、レムゴ。

一、Kaempfers Japan Tokugawa Culture Observed, by Engelbert Kaempfer edited, translated, and annotated by Beatrice M. Bodart-Bailey. 1999.

一、Heutiges Japan, 1/1, 1/2. Hrsg.v. Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel. München 2003.

- ¹ Peter Kapitza: *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung*. 2001 München, S.43.
- ² Engelbert Kaempfers *Amoenitates Exoticae* von 1712 Detlef Haberland: *Engelbert Kaempfers AMOENTATES EXOTICAE von 1712*. (Wofenbütteler Forschungen Bd., 140. Wiesbaden 2014. S.54.
- ³ カール・マイヤー、『東洋奇観』（宮坂真喜弘訳・昭和55年八千代出版）285頁。
- ⁴ Japan in Europa 2, hrsg.v.Pter Kapitza. München 1990, S.89f.
- ⁵ カール・マイヤー、前掲書 304頁。
- ⁶ 同上箇所。
- ⁷ デレク・マサレラ「『日本誌』史 ―ケンペル『日本誌』原稿購入と出版―」142頁。（ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー／デレク・マサレラ編、中 直一／小林 早百合 訳『遙かなる目的地』1999年所収、「第六章」）
- ⁸ デレク・マサレラ（前掲書）
- ⁹ マサレラ論文をはじめ、考証については、中 直一『ケンペル研究の現段階』（大阪大学比較文学会『阪大比較文学』創刊号 2003年およびミヒエル全集版「まえがき」）を参照。
- ¹⁰ マサレラ博士によると、ヘルマンが一七二三年にツォルマンに原稿を売却する以前、シュタイガーターがハノーファーからスローン卿に宛てた一七二三年九月七日付け手紙においても、目次は五卷四七章となっており、英訳より二章少ない、という。また、ドーム版では第一章が「バタヴィアからシャムへの旅行 同地滞在中に見聞した珍しい話」、第二章が「シャム宮廷の現状 首都アユタヤおよび王宮について」とあり、英語版『日本史』と同様である。
- ¹¹ ユーイン・ブラウン『大英図書館蔵ケンペル招来日本史料の意義』『ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展』1990年、108頁。
- ¹² デレク・マサレラ（前掲書）171頁。
- ¹³ ヨーゼフ・クライナー『ケンペルとヨーロッパの日本観』（ヨーゼフ・クライナー『ケンペルの見た日本』所収）47頁。
- ¹⁴ Ch. W. Dohm : *Nachricht, die Urschrift der Kämpferischen Beschreibung von Japan betreffend*. Lemgo, 01.03.1774, S.12-13.
- ¹⁵ Ch. W. Dohm,a.a.O.,S.14. 前掲書 14頁。
- ¹⁶ 上巻「刊行者の序文」188頁。
- ¹⁷ 同上。
- ¹⁸ Ch. W. Dohm『報告』前掲書 38-40頁。
- ¹⁹ ヨーゼフ・クライナー『ケンペルとヨーロッパの日本観』47頁。（ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルの見た日本』（前掲書）所収）
- ²⁰ Ch. W. Dohm『報告』前掲書 38-40頁。
- ²¹ Kaempfers Japan Tokugawa Culture Observed, by Engelmert Kaempfer. Edited, translated, and annotated by Beatrice M.Bodart-Baily. 1999.
- ²² ボダルト＝ベイリー『エンゲルベルト・ケンペル（1651-1761）』『ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展』所収、15頁。
- ²³ 同上書 18頁。
- ²⁴ Peter Kapitza : *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung. Zur Wirkungsgeschichte seines Japanwerks im 18. Jahrhundert*. S.44. Dohm. A.a.O., S.22.
- ²⁵ 前掲マサレラ論文によると、ピュッシングとドームによ

る鑑定は真実とはいえない。マサレラ『日本誌』史（前掲書）参照。

- ²⁶ これまでの考証やミヒエル博士の調査結果を踏まえて、大阪大学の中 直一教授がさらに考証を重ねている。『ケンペル研究の現段階』（前掲）注 9 参照。

Über Text von Kaempfers Japanberichte *„The History of Japan“ oder „Geschichte und Beschreibung von Japan“*

WATANABE Naoki

Zusammenfassung

Es wäre wohl schwer, Kaempfers Text von “The History of Japan“ oder „Geschicht und Beschreibung von Japan“ historisch-kritisch festzustellen. Man könnte vielmehr sagen, dass es wäre unmöglich, auch in Zukunft die Fragestellung zu lösen.

Kaempfers Urtext von „Heutigem Japan“ ist immer noch nicht vollständig entschieden. Der Engländer Sir Sloane hat sich zuerst es von Kaempfers Neffen ,Herrmannn, gekauft und den Schweizer, J.C.Scheuchzer es ins Englische übersetzen lassen. Der Titel heißt „The History of Japan“. Die Schrift wurde im Jahre 1722 in England herausgegeben. Hier geht es sich bis jetzt immer darum, ob die Übersetzung mit der Original-Text „Heutigem Japan“ von Kaempfer übereinstimmt ist.

Hier zeigt sich eine Mutmassung, die aus meinen bisherigen Forschungen abgeleitet wird. Das heißt, Kaempfer hatte zwei Manuskripte von „Heutiges Japan“ gemacht. Eins davonl wurde Lord Sloane verkauft und ein anderes bei dem Neffen verwahrt. Die beiden Texte, die nach der Tod von Maria Magdalene zur Versteigerung gebracht wurde, sind einmal als das Original von Kaempfer und einmal als die Abschrift vom Original zu betrachten.

(2016 年 6 月 1 日受理)